

● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

医療否定本の嘘

— ミリオンセラ近藤本に騙されないがん治療の真実 —

勝俣範之著 扶桑社 2015年7月初版

はじめに

「がん放置療法のすすめ—患者 150 人の証言—」、「がん治療で殺されない七つの秘訣」、「がんもどきで早死する人、本物のがんで長生きする人」、「がんより怖いがん治療」。これらは近藤誠先生の著書で、どれも魅力的なタイトルで、ミリオンセラになってもおかしくない。元・慶應義塾大学医学部放射線科講師、今は、「近藤誠がん研究所」の所長で、セカンドオピニオン外来をされている。本書には、そのことも触れられている。まず引用する。

『30代のある女性の患者さんが、ステージ3の肺がんが見つかり、本書の著書、勝俣先生の外来を受診。手術が可能であれば、術後に抗がん剤治療をしっかり行うことにより、約3~4割の人が治癒する。この方も手術ができる段階であったので勧めた。しかし、「近藤医師のセカンドオピニオンを受けたい」とのこと。近藤医師のところに行っても「放置」としか言われないので、引きとめたが強く希望されたので、紹介した。

ところが、「あの先生の言うことは信じられない」と怒って帰って来られた。まず、「僕の本を読みましたか?」。そして、ステージ3と聞くやいなや、生存曲線を描き、「あなたのがんは進行がんだから治らない。だから治療をしても無駄でしょう。」10分たらずで終了。』

本書の内容は大きく分けて2つ。

1つ目は、近藤先生の理論を引用しながら、科学的にどこが間違っているのかの説明。

2つ目は。がんを専門とする近藤先生が、医療を痛烈に、批判、否定されていることに読者は共感し、そして先生の理論を信じているようである。そのような状況を生み出した今の医療の問題点と、今後のあり方について。

著者の紹介

1963年生まれ。88年富山医科薬科大学卒業。92年より、国立がんセンター中央病院に勤務。04年ハーバード大学公衆衛生院短期留学。2011年より日本医科大学武蔵小杉病院腫瘍内科教授。専門は、腫瘍内科学。

本書の内容・感想

近藤理論の大筋は、次の通りである。がんには、「本物のがん」と「がんもどき」の2つがある。「本物のがん」は早期発見してもすでにどこかに転移していて完治は望めない。よって、治療は無駄。「がんもどき」は、転移する能力を持っていないため、放っておいても大丈夫。よって、どちらの場合も何もしなくてもよい。これが、「がん放置療法」に繋がる。



がんと医師から告げられ治療を勧められても、初期は症状もないし、手術はしたくない。抗がん剤療法、放射線療法も怖い。そこで、選択肢として、「がん放置療法」があれば飛びつきたくなる。患者様の気持ちも理解できるが……。

勝俣先生は、次のように説明されている。がんは次の4種類に分けられる。①放っておいても進行しないがん。②放っておいたら進行していずれは死に至るけれど、積極的治療で治るがん。③積極的治療を行っても治癒は難しいけれど、治療で延命・共存できるがん。④積極的治療を行っても、治癒も延命・共存もできないがん。近藤理論では、この②、③がすっぽり抜けている。また、今の医学では、早期がんであっても①か②か見極めることができない。よって治療するのである。

また、近藤先生の「データ解釈」の間違いも指摘されている。

ところで、どうして、医療否定本がミリオンセラーになるのか。それは、医師の側にも問題がある。患者さんと良いコミュニケーションをとっているか。そのためには、知識も必要だ。恥ずかしながら、私も本書で次のことを学んだ。紹介しよう。

抗がん剤療法は、①がんを治す、②手術後の再発を予防する、そして治癒率を高める、または、③がんとより良い共存を目指すために行う。

早期がんの場合は、転移・再発を減らし治癒を目指すことが目標なので、標準治療を全面に押し出しても良い。ただし、この場合も患者さんの希望や価値観を無視してはいけない。患者さんの希望や価値観は比較的均一だが、一緒に考えていくことが大切である。

一方、進行・再発がんでは治すことは難しくなるため、医療の目的は、「がんとより良い共存」となる。この、「より良い共存」が大事である。進行・再発がんには主に抗がん剤が使われるが、多くの人は、副作用に苦しみながら共存(延命)したいとは思わない。しかし、少しでも長生きしたいとも思う。医師には、抗がん剤の効果を最大限に引き出しながら、吐き気などの副作用を抑える薬を上手に使う技術が求められている。

そして、患者さん個人の希望・価値観に最も重きを置かなければならない。そのためには、医療者は、適切なコミュニケーションをしていくことが大切である。また、患者さんの希望や価値観は、時間や環境、情報などによって変化するので、何度も話し合いを続けていかなければならない。場合によれば、経過観察となる。

その他、参考になることはたくさんあるのだが、それらは実際に本書を手にとって学んでいただきたい。

最後に、「あとがき」より抄出する。

『医療否定本を否定するだけでは、問題は解決しない。問題は、医療否定本が生まれた背景にあると思う。だから、まず、我々医療者が襟を正さなければいけない。

患者さんには、医療否定本に惑わされることのないように、正しい情報を知っていただきたい。その上で、がんという病気に上手に付き合っていただきたい。

(中略)この本がすべてのがん患者さんのための助け手となることを願っている。「がん患者さんの笑顔と希望のために」。』

本書の内容は、がん医療のみならず、医療全体に通じると感じた。是非、皆様方にも読んでいただきたい。私も、本書を参考にして、明日からまた臨みたい。「患者さんの笑顔と希望のために」。

理事 井上 林太郎